



早春、花を咲かせるキクザキイチゲ（2ページ参照）

- 挨拶 ～東大寺大仏殿から県産材利用を思う～
- 知識の泉(森の話/木の話)～春植物/絶滅危惧種～
- 究める/広める/育てる(業務最前線)
種苗生産/コンテナ苗
- 普及に移す技術 木質外構材の手引き
- 自然彩々(センターの四季/生き物たち紹介)
ユキヤナギ/動物たちの冬
- 楽/学広場(イベント・研修会)



新たな県産森林資源利用の広がりに向けて

宮城県林業技術総合センター 農林水産部技術参事兼所長 佐藤行弘

2年ほど前になりますが、結婚以来初めて、プライベートでの一人旅の機会を与えられたので、旅先は以前から考えていた奈良にしました。理由は世界最大の木造建築物である東大寺の大仏殿（正式には「東大寺金堂」）を、直に見たかったからです。チケットを購入し、大仏殿を囲む廻廊の入り口の中門に立ってみたその雄姿は、まさに圧巻の一言でした。大仏殿の規模は、正面の幅約 58m、奥行き約 50m、高さ約 39mとのことですが、それでも現存する建物は、創建当時の3分の2程の大きさとのこと。ちなみに、大仏殿内には創建当時と現在の大仏殿の比較対象モデルがあり、その大きさの違いを確認することが出来ます。仕事から気になるのが使用されている木材の量ですが、インターネットで調べたところ、主要大柱 84 本の大きさは直径が 1 m以上、長さは 30m以上とのこと。また要した木材の総材積は約 1 万 5 千 m^3 と推定されており、現在の一般木造住宅の木材の量を 1 棟あたり 20 m^3 で計算すると約 740 棟分に相当します。大仏殿建設に要した木材の量が、如何に莫大であったかが想像に難くありません。

ところで最近、4年後に開催される東京オリンピック・パラリンピックの新国立競技場が多くの木材が使用されるスタジアム案で決定しました。国内最大級の近代の「大仏殿」の誕生に大いに期待したいところです。しかし過去を振り返ると、戦後間もない頃、都市部の建物も多くが木造で建てられており、一旦火災が発生すると大きな被害が発生したことから、昭和 30 年前後に建築物の不燃化に関する法案等が相次いで出されました。これによって建設資材としての木材の価値が非常に低いものとなり、公共建築物での木材の利用は長い間封印されてきた状態でした。

近年になってようやく、耐火・耐腐朽性が優れた木材製品が出現するとともに、公共建築物への木材利用を促進する法案が後押しとなって、建築資材としての木材の価値が見直されるようになりました。その最大のシンボリックな出来事が、今回の新国立競技場ではないでしょうか。

ところでオリンピックでは建築資材として木材を使用する場合、森林認証された木材を使うことが標準化されているとのこと。しかし諸外国と比べると国内で森林認証を受けている森林は、非常に少ないのが現状です。県内では唯一、昨年、南三陸町の森林約 1 千数百 ha が森林認証を取得しました。町の先駆的な取組に敬意を表するとともに、新国立競技場建設の資材に南三陸町産の木材が使われることを大いに期待するものです。

今や森林認証を取っていることが世界標準です。将来、県産材を含む県内森林資源が他方面に広く利用されるためには、森林認証の取得が不可欠であると認識しなければなりません。私たちは常にその必要性を唱えていかなければならないと思います。ところで大仏殿に戻りますが、現存の大仏殿が創設時の3分の2と小さくなった理由は、単に木材が足りなかったためらしいです。今は森林資源が充実しています。この資源を有効かつ積極的に活用していきたいと考えています。



知識の泉(森の話/木の話)

森林や木材に関するとおきの知識をわかりやすくご紹介します。

◎春植物 (Spring ephemeral = 春の妖精)

早春から花を咲かせ、夏までの短い期間に1年分の光合成をして地上部は枯れ、翌春までを地中の球根などで過ごす植物を、総称して「春植物」といいます。春植物は、上層木がまだ葉を出さないうちに、地表にまで届く太陽光を有効に利用して生活環を全うすることにより、他の植物との無用な競争を避けているわけです (メッサ・みやぎNo18, 19に関連記事)。

代表的な春植物で、当センター内でも見られる数種を紹介します。

○ キクザキイチゲ (菊咲き一華, *Anemone pseudo-altaica*)

まだ寒さの残る早春に咲き出すキンポウゲ科イチリンソウ属の草本で、葉の切れ込みがキク科植物の葉を連想させる形をしていることからこの和名になりました。花びらのように見える部分は萼片で、その色は純白系から濃い紫色系まで変異があります。当センターでは、純白系と薄紫色系の本種を見ることができます。



キクザキイチゲ (純白系)



キクザキイチゲ (薄青系)



アズマイチゲ

○ アズマイチゲ (東一華, *Anemone raddeana*)

上のキクザキイチゲよりも葉の形が単純な切れ込みで、葉の先がやや垂れ下がりぎみになっています。また、キクザキイチゲは葉の基部が茎をやや抱いているのに対し、こちらのアズマイチゲは細い葉柄で茎に付いているので、見分けは簡単です。花びらのように見える萼片の数は、キクザキイチゲよりやや多いようです。

○ ニリンソウ (二輪草, *Anemone flaccida*)

上の2種と同じイチリンソウ属ですが、茎の上部に花を1~2輪咲かせます。沢沿いなどのやや湿った場所を好み、マット状に群生することもあります。キンポウゲ科の植物は、トリカブト類に代表される有毒植物がほとんどですが、このニリンソウだけは山菜として食べることができます。しかし、葉の形や色はトリカブト類にも似ていますので、無理しない方がいいと思います。



ニリンソウ



カタクリ

○ カタクリ (片栗, *Erythronium japonicum*)

ユリ科カタクリ属の草本で、花は濃い赤紫色からほとんど白色のものまで変異がありますが、多くはきれいなピンク色です。イチリンソウ類よりもやや遅れて、4月中旬ごろに満開となります。落ちた種子から発芽した1年目の葉は1枚の細い糸状で、2年目からやや丸身を帯びた葉になり、7~8年目になって2枚の葉となった株にやっと花が咲きます。

なお、「片栗粉」の中身はジャガイモ澱粉ですが、かつて本種の球根から澱粉を取って使っていた名残です。

【環境資源部 菅野 昭】

◎センターの貴重な植物について

○はじめに

センター内には500種以上の維管束植物が自生し、その目録は成果報告第24号（平成27年）に報告してあります。このうち宮城県レッドリスト2013年版に掲載されている絶滅のおそれのある植物についてまとめたので紹介します。一部については、『メッサみやぎ』の“自然彩々”にやや詳しく載せてありますのでそちらも御参照ください（㉔サクラソウ、㉕センウズモドキ、㉘エビネ、㉚ヒメシャガ・・・○内の数字は号数）

○カテゴリーごとの掲載種

区分及び基本概念	具体的要件	科名	種名
絶滅 EX 既に絶滅したと考えられる種	【環】絶滅	リンドウ	ハルリンドウ (1988) [一]
絶滅危惧Ⅰ類 CR + EN 絶滅の危機に瀕している種	【環】絶滅危惧Ⅰ類 ・近い将来に絶滅 極高 絶滅危惧ⅠA類 ・近い将来に絶滅 絶滅危惧ⅠB類	サクラソウ	サクラソウ (2015) [NT]
絶滅危惧Ⅱ類 VU 絶滅の危険が増大している種 現在の圧迫要因が続くとⅠ類へ	【環】絶滅危惧Ⅱ類	スミレ スミレ ラン ラン クマツヅラ キク	フモトスミレ (2000) [一] シハイスミレ (1988) [一] エビネ (2014) [NT] キンラン (2013) [VU] クマツヅラ (2014) [一] オナモミ (2007) [VU]
準絶滅危惧 NT 絶滅危惧に移行する可能性	【環】準絶滅危惧	ジンチョウゲ アヤメ スゲ	オニシバリ (2014) [一] ヒメシャガ (2013) [NT] オニナルコスゲ (2014) [一]
情報不足 DD 評価する情報不足	【環】情報不足	ユリ	ナルコユリ (2014) [一]
要注目種 現在は普通にみられるが注目種	*本県独自 ・隔離分布等	キンポウゲ	センウズモドキ (2014) [VU]

【環】は環境省の区分

()内は最終確認年 []は環境省

センター内には、県のレッドリストのうち13種、環境省のリストでも6種があることが分かりました。このうち、サクラソウは3つの沢に、センウズモドキは2つの沢に、エビネ・ナルコユリは1つの沢で群落として見られ貴重な植物となっており、後世まで残しておきたいものです。





究める／広める／育てる

センター業務の柱である試験研究や普及指導、人材育成（研修）業務の最前線をご紹介します。

◎種苗生産 ～持続的な優良種苗の生産に向けて～

今回は、試験研究、普及指導に並ぶセンターの主要業務である種苗生産について、現状とその管理を紹介いたします。

(1) 種子生産量の推移

(単位：kg, %)

区分	H23	H24	H25	H26	H27	H27 発芽率
スギ	73.5	32.6	60.0	30.7	59.9	42.0
ヒノキ	90.5	4.4	30.0	1.8	11.5	50.0
アカマツ (精英樹)	0.7	0.3	5.0	2.7	0.9	97.0
クロマツ (精英樹)	20.7	0.1	2.1	1.2	4.3	89.7
クロマツ (抵抗性)	9.9	0.3	7.0	5.1	12.0	98.0
計	195.3	37.7	104.1	41.5	88.6	—

今年度の種子生産量はすべての樹種で並作でした。スギ・ヒノキでは3年周期の豊凶によるバラツキがあるので、凶作の年には、貯蔵している豊作年の種子で対応しています。今年度採取した種子の発芽試験検定を実施したところ、スギ・ヒノキ・アカマツ精英樹・クロマツ抵抗性は平均的な発芽率を超え、クロマツ精英樹は平均的な発芽率を少し下回る数値でした。また、今年度、アカマツ抵抗性採種園からは450g採種しており、今後供給体制を強化していくところです。

優良な種苗を毎年生産していくため、採種園の管理は不可欠です。毎年、適期に複数回の下刈作業や、施肥、断幹、整枝剪定を行っています。今年度、林業用種子生産機械一式（種子乾燥機、種子選別機、種子発芽試験器、関連付属品）が更新されるので、作業の効率化や品質が向上することに期待しています。

(2) 花粉の少ないスギさし木苗（花粉症対策苗）生産量の推移

(単位：本, %)

区分	H23	H24	H25	H26	H27
さしつけ本数	80,736	75,857	92,015	81,721	92,260
一番苗 (発根数2本以上)	68,546	68,888	79,263	57,329	62,488
発根率	84.9	90.8	86.1	70.2	67.7

花粉症対策スギさし木苗の販売本数は、一番苗（販売価格25円）及び二番苗（販売価格10円）を含めて68,300本でした。「スギ花粉発生源対策推進プラン」のH27年度目標は、さし木苗生産70,000本ですので、それを僅かに超えることができませんでした。今年度におけるさし木苗の発根率の低下は、3棟のうちの2棟で生じた8月の高温時の灌水不足が原因と考えています（灌水パイプ立ち上がり付近の枯れが多く、残りの1棟では通常でした）。そこで、H27年度は地下水貯水槽からミストハウスや馴らし床に直結する配管（ポリエチレン2層管1種）を新設し、H28年度は灌水用深井戸水中ポンプが更新されることから、灌水不足が解決し発根率がアップするものと思われます。H27年秋期から当センターから苗木生産者に出荷されたスギ発根済さし木苗（花粉症対策苗）は、コンテナへの移植が始まりました。これまで苗木のコンテナへの移植は、発芽直後の幼苗以外はほとんど行われていなかったのですが、今後、スギ花粉症対策品種苗のコンテナ移植技術が確立され、花粉発生源対策品種等のコンテナ苗の増産が図られていくことが期待されます。



掘り取った発根済みさし木苗

【企画管理部 佐藤千一】

◎下刈り作業の省力化は可能か ～その1～

下刈り作業にかかる経費は、育林経費の約4割と非常に大きく、伐採跡地の再造林意欲が低下する原因ともなっています。先日「コンテナ苗を活用した低コスト再造林技術の実証研究セミナー」が東京大学で開催され、下刈り省力化について発表しましたのでその一部を紹介します。

○雑草にとっての光合成と生長

光は「光量子」と呼ばれるエネルギーを持っていて、量子力学の中でエネルギー量（粒子）として確立したのは、アインシュタインです。

植物はそれを光合成に利用しますが、光の吸収は光量子を単位として行われ、吸収は常に分子が一時に1個の光量子を取り込むという形で行われており、光合成で利用できる光は、光合成有効放射 PAR¹⁾ と呼びます。

試験地を上部と下部に区分した光量子の PAR は、季節間のバラツキはあるものの日照時間が1日の半分程度の試験地の斜面上部に対し、全日日照の斜面下部との平均比率は1：4となり、光合成と雑草の生長量の間には相関関係が示唆されました。(図-1)。

PAR¹⁾ (Photosynthetically active radiation)

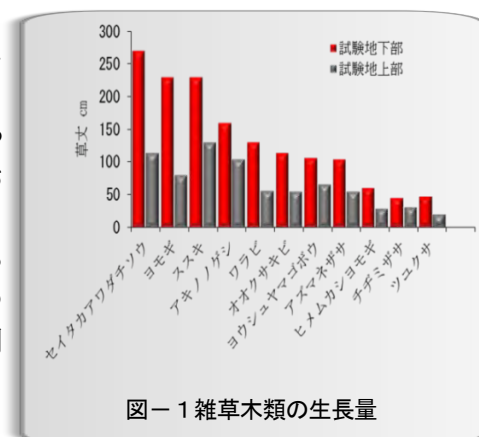


図-1 雑草木類の生長量

○下刈り別の作業にかかる時間

通常の1回刈り・2回刈り、それに地際から地面すれすれではなくスギの樹冠より雑草木をやや高くする「高刈り」を行いました。「高刈り」は雑草の新梢の先端を早い時期に摘む摘心するようなもので、徒長枝を抑える効果が考えられます。刈り終わったときの見た目は雑草が残り、刈った感じがしませんが、高刈りも雑草管理の1つとして効果が期待されると考えられます。

作業時間は普通刈り平均の50%程度(図-2)に抑えられ、燃料消費の低減に一定の効果が認められました。また作業性は、過度な草刈り圧ではなく回転刃が地際に直接つかないため小石などの異物の飛散が起こりにくく刃の消耗を防ぐ点に加え、誤伐の心配がない副次的効果が認められました。

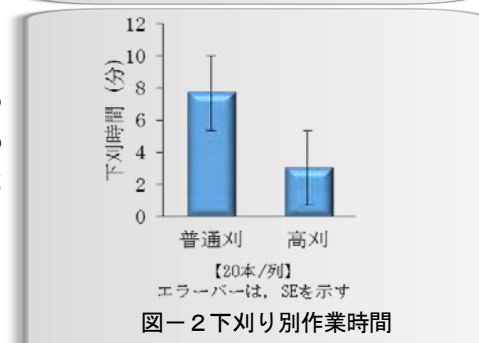


図-2 下刈り別作業時間

○下刈り別スギコンテナ苗の生長

これまで、下刈りとスギ植栽苗の生長関係は詳しく分かっていませんでしたが、遺伝的同一のクローンコンテナ苗の苗高と地際径の生長率を調べたところ、「高刈り」は植栽後の早い時期から苗高生長が旺盛であることが示唆されました(図-3)。スギの周囲に雑草が茂っていても、草丈と同じ高さのスギ梢端部に1年を通して光が当たれば生長は低下しないことが分かりました。

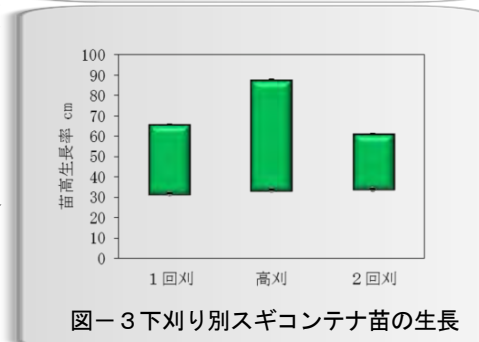


図-3 下刈り別スギコンテナ苗の生長

○下刈り別スギコンテナ苗の形状

下刈り別に平均形状比を求めた結果、2回刈りは63～68、1回刈りは75～79、高刈りは82～92となりました(図-4)クローン・実生混合苗とも高刈りは形状比が高く雑草木の影響を受けているようです。形状比が高い場合、根元に対して細りの少ない完満の形状となります。

林業経営的には完満度の高い形状は有利ですが、林分の込み具合(収量比数)と連動するため風害や冠雪害を吟味した密度管理が必要でしょう。

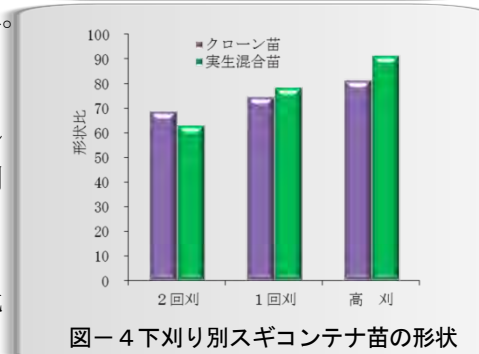


図-4 下刈り別スギコンテナ苗の形状

【環境資源部 伊藤俊一】



普及に移す技術

センターでの試験研究成果等を基に、現在普及活動を行っている技術情報についてご紹介します。

◎木質外構材の効果的な利用のために

木材は再生が可能な資源です。伐採した後に再び造林し、育てていくことで新たに資源が蓄積され利用できるようになります。この循環を繋げていくためには伐採した木材を多様な場面で利用し、経済的な価値を付加することが求められます。外構材に木質系の材料を活用することもそのひとつの手段となることから昨年度までの研究課題「木質外構材の機能性・耐久性向上に向けたメンテナンス手法の開発」の成果として、パンフレット「木質系外構材の効率的な利用のために」を作成しました。このパンフレットはセンターホームページに掲載しているのでご覧ください。本稿では、紙面の都合上詳しく記載できなかった事項の中から木材の変色について説明します。

○木材はなぜ変色するのか

木材を構成する主な化学成分はセルロース、ヘミセルロース、そしてリグニンです。セルロースは多糖類で木を支える骨組みの役割をし、リグニンはフェノール類の一種でセルロースの間を埋めて、骨組みを固定する役割を果たしています。太陽光が木材に当たると、リグニンが紫外線を吸収し分解されやすくなります（この性質により反射して目に入ってくる紫外線が低減されるため、木材は「目に優しい」素材でもあります）。紫外線によってリグニンが分解されることにより水に溶けやすい化学物質が雨水により流れ出てしまうため、木材の変色と劣化が起きます。どのように変色するかは樹種により異なりますが、多くは一旦濃色化したあと、淡色化を経て灰色になります。さらに、この劣化により、早材部（年輪の間の柔らかい部分）が沈み込むことにより凹凸が生じる「目やせ」をしたりひび割れたりすることにより、空気中のカビや菌類といった変色を引き起こす物質が付着しやすくなり、くすんだ色合いになっていきます。



無塗装試験体の屋外曝露試験
右が試験前、左が試験後

○変色への対処法は？予防法は？

変色のみで腐朽していない木材の場合、表面を削ることで、もとの風合いを取り戻すことができますが、あくまで一時的な手段です。無垢材の風合いは魅力的ですが、屋外で使う場合にはあらかじめ塗装を施しておくことが最も有効な予防法です。



同じ建物でも日差しの違いにより変色度合いが異なります
(左が南面、右が北面)

<参考・引用文献>

木材科学講座 12 保存・耐久性. 海青社 1997

木材保存学入門(改訂版)
社団法人日本木材保存協会
2001

林野庁ホームページ「公共建築物等木材利用促進法・木づかい運動」

【地域支援部 玉川和子】



自然彩々

地域のオアシスでもあるセンターの四季折々の自然や、センター内に生息している野生動植物たちをご紹介します。

◎春告花—ユキヤナギ—

ユキヤナギ（雪柳）*Spiraea thunbergii* は、日本に自生する（栽培品であるという説もあり。中国名は「噴雪花」。）バラ科の落葉低木で、本州では宮城県南部が北限といわれています。4月になると、叢生する茎から伸ばした多数の枝は、雪を思わせる真っ白な小花にびっしりと覆われます（写真—1）。その姿は春の訪れを感じさせる春告花です。

日本人には古くから親しまれ、『山科家礼記』（1412年）、『尺素往来』（1489年）の中で「庭柳」、『松屋会記』（1627年）、『立花大全』（1683年）の中で「岩柳」の名前で登場しています。現代でも花が美しく全体の姿がまとまっており、病害虫も少なく適応力があるため、庭木、公園樹、生垣のほか、生け花、茶花などに利用されています。



写真—2 ユキヤナギ（小花と花序）

びっしりと

ついている花は近づいてよく見ると、前年に伸びた枝の葉の付け根に、小花が2～7個からなる散形花序をしています。小花の直径は約8mm、白い5枚の花弁は円形または広倒卵形で、白い花の中心に黄色く見えるのは、花弁の基部の内側にある蜜腺です（写真2）。

葉は互生し、長さ2～4.5cm、幅5～12mmで小さな鋭い鋸歯があります。また先はとがり、基部はくさび形で葉柄はほとんどありません。若枝は褐色で縦に筋がありはじめ白色の短い毛があるが後に無毛になります。

数多くの品種が開発され、切り花用には“蒲田早生”、“蒲田高生”、“小雪”など、早生で休眠明けが早く、枝の湾曲が少ないものが、庭木用には淡いピンクの花をもつ“フジノピンク”や若葉が黄金色の“黄金ユキヤナギ”などがあります。なお、センターには数株のユキヤナギが植栽されていますがそのうちの一株は切り花用のものと思われ、冬でも花を咲かせます（写真3）。早い時は11月から見られその後の冬にもポツポツと咲かせますが、花柄が短く花の数も少なく完全に開かず終わるものが多く、4月に咲くような完全な花とはいえないようです。

この仲間には八重の花の「シジミバナ」、白い花の集まりが小さな鞠の様に見える「コデマリ」やピンク色の美しい「シモツケ」などがあります。

参考・引用文献

- 自然百科シリーズ 10 宮城の樹木 河北新報社 1997
 山溪ハンディ図鑑 3 樹に咲く花 離弁花① 山と溪谷社 2000
 原色園芸植物図鑑 Vol.V 花木編 保育社 1973



写真—1 ユキヤナギ（4月）



写真—3 冬に咲くユキヤナギ(11月)

【環境資源部 梅田久男】

◎冬の野生動物たちの暮らし

この冬は暖冬でしたが、1月になり、大衡村でも雪が積もりました。野生動物たちはこの時期どのような暮らしをしているのでしょうか？

<冬の越し方>

積雪があったり、食べ物が少ない冬をどう過ごすかは種によって様々です。冬は気温が低いいため、体から失うエネルギーが多く、体温を保ち、生命を維持するために越冬戦略が必要となります。その戦略は、体の大きさや餌の量の季節変化などによって変わります。

<冬毛になって活動時間を制限する>

当センター内でもよく雪上の足跡がみられるノウサギやキツネは、「がんばって越冬する」種です（写真－1，2）。冬は活動時間が少なくなるようですが、雪上でも自動撮影カメラに写ることが多く、体温を維持するために冬毛に換わり、キツネのしっぽ（尾）はふさふさに見えます（写真－3）。ノウサギの冬毛は積雪の多い地域では真っ白になりますが、平成28年1月21日にセンター内で目撃されたノウサギは、真冬でも全身茶色の個体だったそうです。宮城県では真っ白な個体、茶色と白のまだらの個体を見たことがありますので、いろいろな毛色になるようです（まだらの個体は換毛中かもしれません）。



写真－1 雪上のノウサギ



写真－2 雪上のノウサギ2

<準備した食べ物を食べる>

センターでちょくちょく観察できる小さなニホンリスは、春から秋に貯蔵した種子などの食べ物を利用して生活する「冬支度をして越冬する種」です。ニホンリスは土の中にクルミやドングリ、まつぼっくり、種子などを浅く埋めたり、木の枝の又にはさむこともあり、貯蔵食物の61%が地中、39%が樹上との報告があります。土に埋めると腐りやすいキノコやアケビなどは、樹上に貯蔵します。貯蔵した食べ物は、見つけたもの勝ちで、違う個体にも利用されます。

<冬は寝て越す>

コウモリ類やツキノワグマ、ヤマネは、いわゆる「冬眠」をします。コウモリ類やヤマネは昆虫を食べる割合が多く、食べ物を蓄える習性がないため、秋までに体に蓄えた脂肪を消費しながら冬は寝て越します。代謝を極力まで落とし、体温が0度近くにまで落ちる「冬眠」を行うヤマネや、体温の低下度が小さく、途中で起きることのない状態である「冬ごもり」を行うツキノワグマがおり、クマの冬眠穴は、樹洞、岩穴、根上がり、倒木の下、崖や斜面のくぼみ、古い炭焼き釜跡、雪の中など様々です。



写真－3 積雪の中活動するキツネ

<季節移動して冬を越す>

積雪が多い地域や高標高地域に生息するニホンジカは夏と冬の行動圏が異なり、冬は雪の少ない越冬地に移動します。栃木県奥日光のシカは足尾地区に移動し、北海道のエゾシカも温泉のある阿寒湖周辺が越冬地になっています。

野生動物にとっては活動が制限される冬ですが、それぞれの方法で冬を越し、春を待ちわびていることでしょう。

参考資料：日本動物第百科第1巻哺乳類I，平凡社，1996

冬眠する哺乳類，川道武男・近藤宣昭・森田哲夫，東京大学出版会，2000 【環境資源部 佐々木智恵】

◎平成 27 年度「里山林の管理基礎講座」を開催しました

私たちの身近な里山林は、昔から多くの恵みを私たちにもたらしてきました。近年、環境保全の重要性の再認識や、ライフスタイルの多様化に伴い、森林に対する要求やかかわり方が変化しております。特に里山林は、自然とふれあうレクリエーションや環境教育の場所として見直されていますとともに、野生動物を始めとする生物多様性を守る空間として、その価値が注目されています。

このため、里山林の特徴・整備の方法や、道具の使い方などの講座を開催し、県民の皆様による森づくりの活動を支援する「里山林の管理基礎講座」を5回シリーズで実施しました。

【第1回：10月3日（土）】里山林の特徴や樹木観察の方法などの講義や、近隣の良く整備された里山林で、森づくりの着眼点、留意点など「里山林管理の意義」について行いました。

【第2回：10月17日（土）】下刈鎌・鉋の使い方や研ぎ方、刈払機・チェーンソーの基礎的な知識や使い方・点検整備の方法など「道具の使い方とメンテナンス」について行いました。

【第3回：10月31日（土）】チェーンソーによる上下伐り、受け口・追い口伐りなどの伐木模擬訓練や、当センターのスギ林で、実際に伐木するなど「チェーンソー操作や安全作業」について行いました。

【第4回：11月14日（土）】広葉樹の更新方法などの講義や、グループごとに広葉樹林の植生状況などによる森づくりの目標設定の討議など「広葉樹林の整備方法」や、「竹林の整備」について行いました。

【第5回：11月28日（土）】スギ林を対象に間伐の目的などや、毎木調査・間伐木の選木実習など「人工林の森づくり」、孟宗竹などを使った「ミニ門松」の製作を行い、講座終了後には、修了証書が授与されました。

本講座は、今後も継続しますので、山林を所有しているサラリーマンや森林ボランティアの皆様方の参加をお待ちしております。



里山林の樹木観察



チェーンソーによる伐木実習



スギ間伐実習（林分調査）



孟宗竹・真竹を使った「ミニ門松」作り

【普及指導チーム 佐々木幸敏】

◎成果発表会を開催しました！

去る12月11日、大衡村平林会館にて約100名の来場者を迎え「宮城県林業普及活動・試験研究成果発表会」を開催いたしました。午前中に行われた「普及指導部門」では、県内7つの地方振興事務所・地域事務所の林業普及指導員がそれぞれの取組みについて発表しました。審査の結果、登米市産のコナラ材を学童用机として活用した取組みを発表した登米地域事務所が最優秀賞として表彰されました。優秀賞には、きのこ生産者とタッグを組んで出荷制限解除に取組んだ仙台地方振興事務所と、女川町において新たに自伐林家4名を誕生させた東部地方振興事務所が受賞しました。



会場の様子



センター研究員による発表

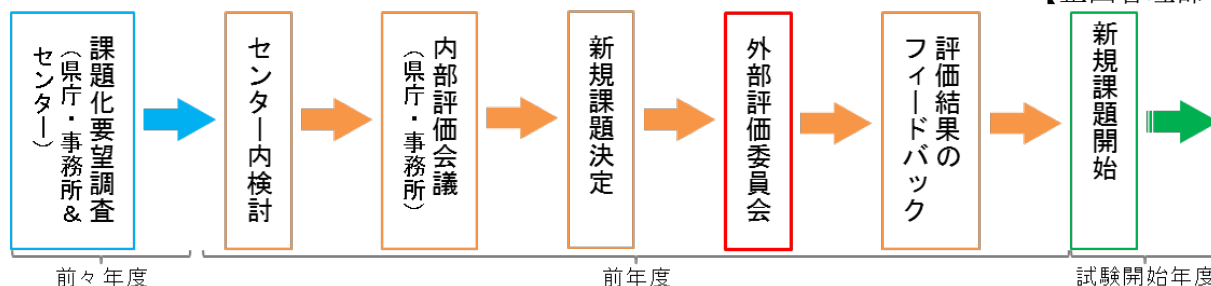
午後は、当センターの研究員の取組みを紹介する、「試験研究成果部門」の発表を行いました。発表内容は、これまで難しいとされてきたクロマツさし木技術を確立したこと、個体数が増加しているニホンジカの管理方法についての提言及び6ページに掲載されている木質外構材のメンテナンス手法についてでした。また、「特別発表」として、松島町林業経営研究会の渥美氏から、林研活動を通じた地域林業の活性化についてご講演いただきました。会場の皆様も、真剣に聞き入っているようでした。

◎来年度に向けて～新規研究課題の外部評価～

当センターで取組む試験研究課題は、下図のように決定されます。

試験研究に関して、外からの目線で評価いただいていることについては、No.38号でお知らせしたとおりですが、新しく取組む研究課題についても、ご多分に漏れず、です。そこで、来年度新たに始動する研究課題を評価いただくために、12月7日に外部評価委員会を開催しました。評価対象は、来年度から新しく取組む5課題のうち、重点課題となる2つの研究課題、「スギ大径材の活用促進に関する研究」及び「スギ低花粉対策品種等のコンテナ苗増殖技術の開発」です。研究をスタートさせる前の事前評価は、これからの取組みにダイレクトに反映させることができるので、非常に重要となります。評価会議の場では、「センターをよりよくするために」と、厳しくも建設的・発展的なコメント・意見をいただきました。これらの意見・コメントをセンター全体で受け止め、来年度新規にスタートする評価対象課題にも、他の研究課題にも活かして参ります！

【企画管理部 田邊 純】



宮城県林業技術総合センター

〒981-3602
 黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14
 TEL022-345-2816 FAX022-345-5377
<http://www.pref.miyagi.jp/stsc/>



メッサ(METSÄ)とは・・・
 森をこよなく愛するフィンランド人の言葉で「森、木」を意味します。